

第2章 史跡を取り巻く環境

第1節 史跡の位置する地形

1. 尖石台地の地形と湧水

尖石遺跡の位置する地形は、八ヶ岳火山列の活動により形成された長峰状の特徴的な台地で、標高 1,050m から 1,070m に位置し市域の縄文時代中期集落の中で標高の高い場所に占地する。

遺跡が立地する台地は、八ヶ岳山麓特有の東西方向に延びる長峰状の台地と、台地間には必縦谷が形成される。〃尖石、南側の谷は八ヶ岳西麓標高約 1,200m から谷として分岐し、谷内を流れる川は入合戸川となり、〃尖石、付近の谷幅が約 85m としっかりした谷が形成されるのに対し、尖石遺跡と与助尾根遺跡を隔てている谷は、標高約 1,100m から分岐しはじめ、尖石遺跡と与助尾根遺跡の間の谷幅約 35m と狭く遺跡間は指呼の距離にある。

尖石遺跡南側・北側斜面と与助尾根遺跡南側斜面は、現状では急峻な斜面や崖状を呈しているが、尖石遺跡北側、与助尾根遺跡南側の崖状の斜面は、谷戸田開田に伴い小河川を利用した用水を水田脇に付け替えて台地斜面を掻き崩し、田面を広めようとした結果生じたものと考えられ、本来緩やかな斜面や複雑な地形を形成していたものと考えられる。なお、与助尾根遺跡谷上部の分岐する範囲には旧状が残されている。なお、台地北側は凍結崩落を繰り返し、その結果斜面崩落が進行し現状のような急峻な斜面が形成されものと考えられる。

尖石遺跡南側斜面もかなりの傾斜を持っているが、中段でやや緩やかな斜面に変換し小規模であるがテラス状の緩斜面となる。なお、一部の崖には台地形成起因の菅沢火砕流・大塩火砕流に含まれる軽石等の火山噴出物も見られ、〃尖石、もこうした火砕流噴出物の安山岩類が露呈したものと捉えることができる。

分析を行ってはいないが〃尖石、は地質学的には八ヶ岳天狗岳・硫黄岳起源の安山岩類と考えられが、石の少ない場所柄上、現在高約 1.2m で三角錐を呈する様は〃とがりいしさま、と称するには相応な巨石である。この〃尖石、について宮坂英式は『尖石』内で巨石尖石の項目を起し下記のように記している。〃尖石、に対する重要な記述が多いため長文であるが、引用する。

「巨石尖石 石質は安山岩であろうか。形状三角錐をなして直立する。地表高さ 1.20 米、底辺南最も長く 1.15 米他の二底辺は 70 糎である。石の根は地中深く没し何程あるか未だ発掘調査されない。この石の南側面最も広く他の 2 面の表が平滑なるに対し、この面は凹凸が甚しく、それは人口によるものか自然的のものであるか不明である。或は、石器時代の象形文字を刻したものででもあろうかと研究されたが確定に至らない。然しこの尖端の東肩の一部が窪く磨滅しあって、これが磨石砥として共用されたことは明瞭である。尖石の地名は、この石の形状に由来する。現在石の東側の根元に石祠 1 基を祀り、これに酉年小平氏と刻むが其の建立の由来を瞭にしない。古来この地を長者屋敷と称し、部落民はここに集積してあった巨石を運んで珍重したとのことで、現在かかる石を庭石にしている家が 4 戸あり尚其の 1 個が前の堰に埋もれている。かつて物好きな人がこの石の根元に宝を探すと称して掘り始めたところ神罰は忽ち觀面に其の人は忽ち瘡おこりにかかって死に至ったとか今に恐れられてこの石の根元を掘る人がいない。然し 7 年毎の御柱祭には、区より御柱を寄進し、其の周囲に建立し、現在部落民の信仰の対象となっている。従ってこの石の所在地 1 筆 3423 番は区有地として未墾の儘に残され雑草茂り巨石の傍に唐松の巨樹が聳えている。」(文献:1)

第2章 史跡を取り巻く環境

尖石、のような火山活動起因の巨石は、尖石、南側谷部を東方向に約 2.9km 遡った場所に上広見の施餓鬼石（泣き石）、と呼ばれる巨石が露出し様々な霊異談が伝わっており（文献:2）、尖石、も同様に周辺では珍しい巨石と認識されていたものと想像することができる。

尖石台地の東西方向に延びる尾根状台地の南側斜面には、尾根に直行する形で崖錐地形が認められ、この崖錐地形部分が入り組み状となり下段に崖錐堆積物が堆積している。このような崖錐堆積物がテラス状緩斜面の形成に関わった可能性が高い。

現況では急斜面を成す台地斜面は、斜面崩落や開田と台地裾部の堰開削により旧地形は改変され、当初の地形は緩やかな斜面が尖石南側谷部へ延びていたものと考えられる。なお、宮坂英式の調査によると、この緩斜面に石囲い炉址が2ヶ所検出されている。

尖石、南側谷部は現状では開田により旧地形は残存していないが、水田畦畔のあり方から考えると台地緩斜面が湧水点付近まで伸び、湧水点を囲むような低い尾根状台地があったものと考えられよう。

尖石遺跡周辺の標高約 1,100m 付近は地形の変換点となり、尖石遺跡の占地する台地は、西側約 2.5km 下方の南大塩地区まで続く基幹の尾根状台地であるのに対し、与助尾根南遺跡、与助尾根遺跡の占地する尾根は、この標高約 1,100m 付近の八ヶ岳山麓の伏流水が湧出する箇所から分岐する小さな尾根状地形で、与助尾根遺跡で東西の長さ約 400m、与助尾根南遺跡で東西の長さ約 130m となる。

この尖石遺跡と与助尾根南遺跡、与助尾根遺跡付近の地形を俯瞰すると、ちょうど八ヶ岳起源の火砕流が流れ下り、湧水点を境に尾根が西方向に手状分岐する地形の特性を看取することができる。

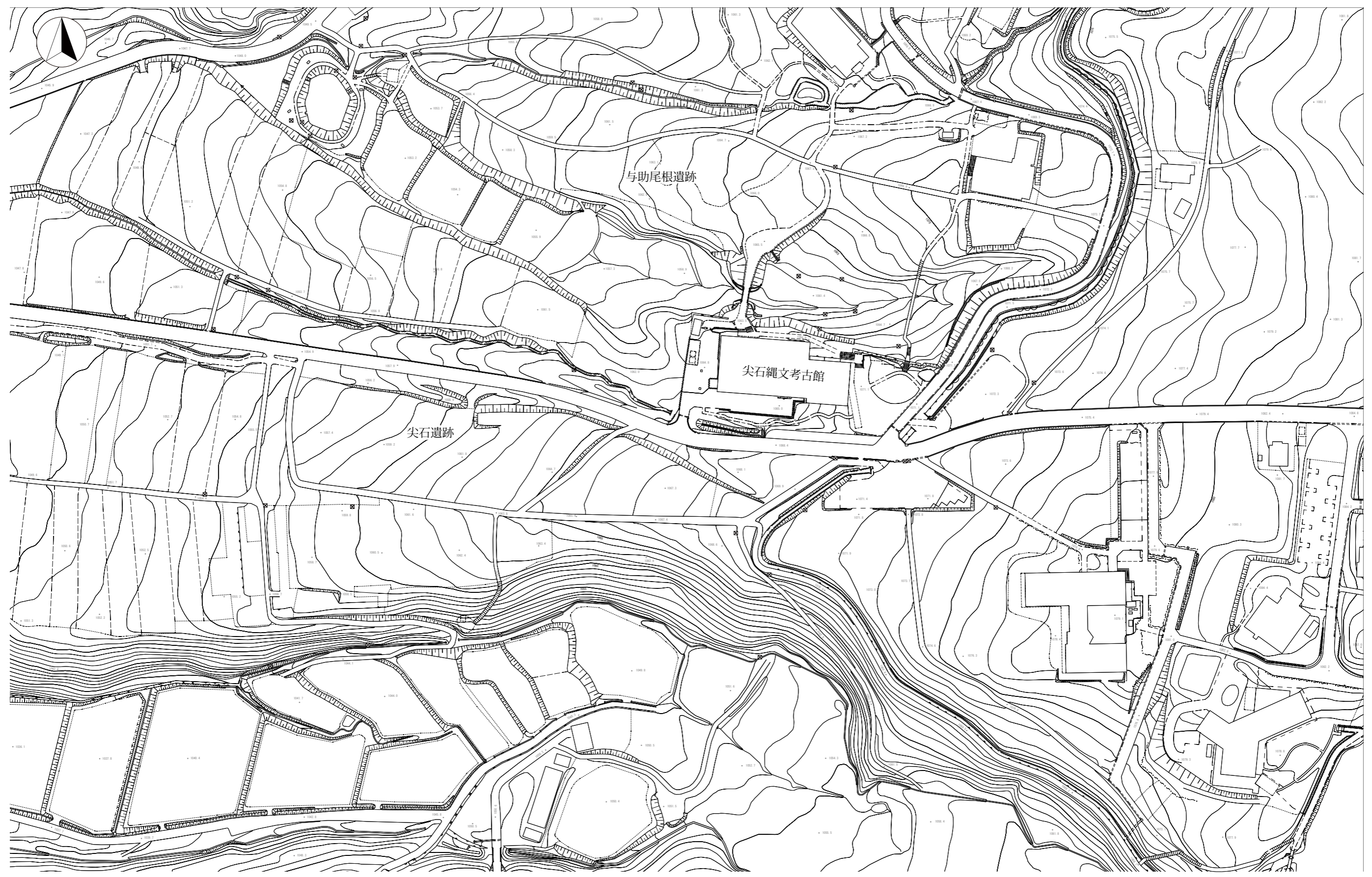
なお、与助尾根遺跡と与助尾根南遺跡・尖石遺跡を隔てる入り組み谷状地形からの伏流水について、台地分岐地点上部を南北に流れる滝之湯堰からの漏れ水ではないかとの疑義もあったが、水文環境調査の結果によると滝之湯堰の夏季水温（7月）16.10度に対して、湧出点では14.60度と、湧水点水温が1.5度低い状態にある点、冬期間滝之湯堰の通水が止まった時も湧水点の流量に変化がみられなかった点などから、滝之湯堰からの漏れ水ではなく八ヶ岳の伏流水であることが判明している（文献:3）。

なお、入り組み谷の谷頭は複数に分岐し、浸み出すような形で水が出ている。この状態を観察すると谷頭浸食かと考えられ、この浸食が谷部の形成に大きく関わっていたものと考えられる。また、谷頭から下流域にかけて表層水が集まり水量が増してくる傾向も捉えられている（文献:3）。

与助尾根南遺跡南側谷部、与助尾根遺跡南側谷部は谷頭浸食により形成された谷部と考えられ、与助尾根遺跡北側には谷頭浸食の進行途上の地形が見られ、小規模な谷起伏と湿潤な場所も見られ、地元では「ドジョウ原」と称され耕作不適地として放棄されている。

また、尖石遺跡が占地する台地を詳細に観察すると平坦で様な地形ではなく、いくつかの起伏があることがわかる。最も幅広の台地南側範囲と遺跡北側に微妙な起伏を持つ小さな尾根状地形が観察できる。また、市道甲1号線に向かって緩やかな傾斜で浅い谷が入り込んでおり、一概に一つの台地と括らず、むしろ大きな台地内に小さな起伏の微高地状の尾根状地形が、三つに分岐した形で認められ、複雑な地形であると捉えることができる。規模等に相違があるが、このような複雑に分岐する尾根状地形を、与助尾根遺跡北側にも認められ、浅く分岐する谷間は湿潤な状態を呈している。このことから想像すると、尖石遺跡内の浅い谷も同様に湿潤な環境を呈していた可能性がある。なお、この複雑に分岐する尾根と谷の関係は、どうも標高約 1,100m の八ヶ岳伏流水の湧出と関連があるように思われる。

なお、このような小起伏の微地形は、時々の耕作の状況により改変され、遺跡南側斜面部は、桑畑造成により棚畑状に改変されたが、昭和初期の蚕糸業不況で桑が抜根され野菜栽培が行われた。特に台地上の平坦



第2図 尖石遺跡周辺の地形 (1/2,000)

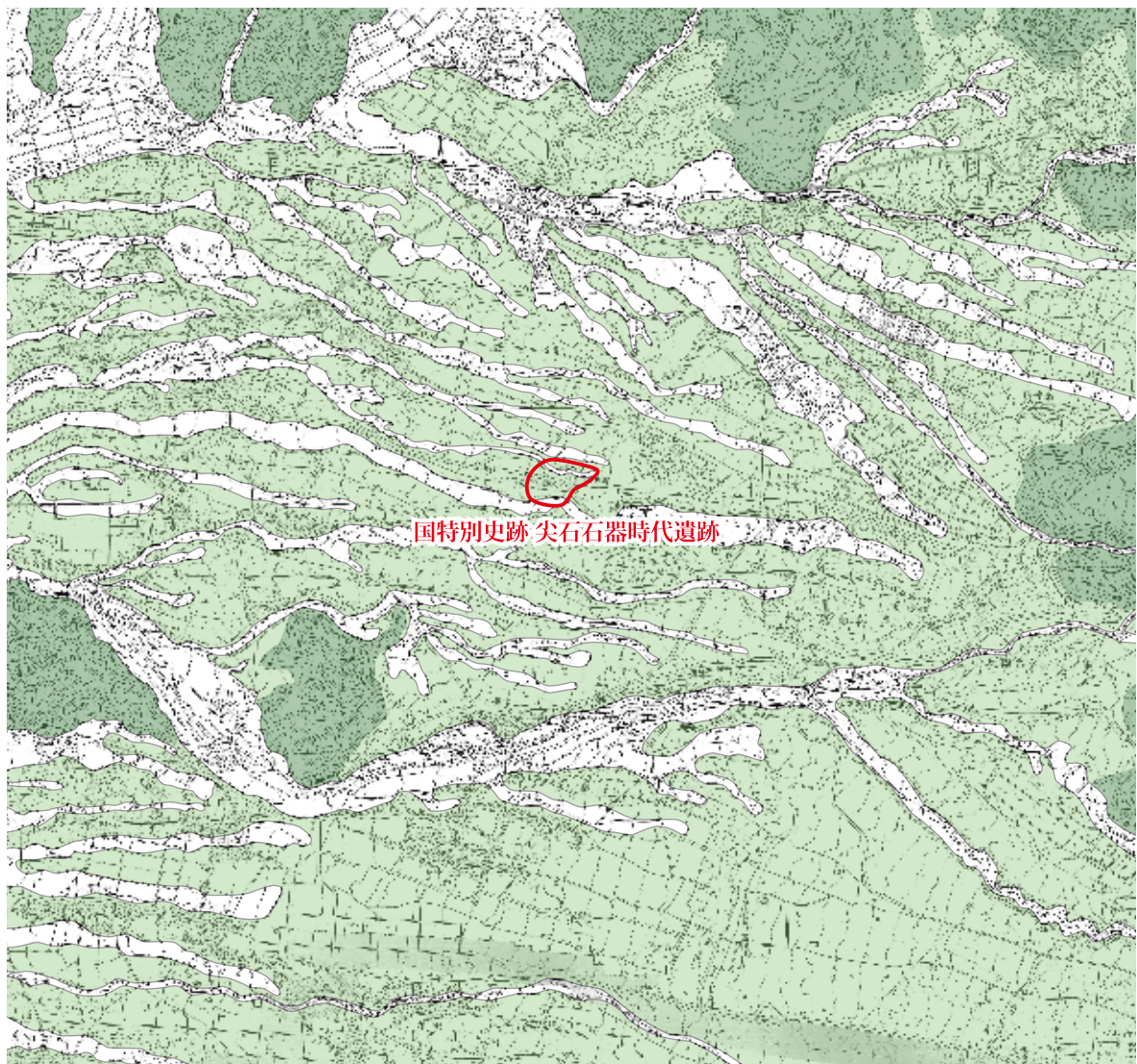
な畑地は、戦後に石のない黒ボク土と、冷涼な気候に着目した高原野菜の栽培が行われ、特に大根は、蓼科大根、としてブランド化され大形農業機械を導入し栽培が行われた。その結果、台地頂部から谷状の微地形の低い部分へ表土が動かされ起伏の少ない地形へと改変し、現在平坦に見える地形は後世の耕作による結果と考えることができる。また、台地南側斜面部に於いても、畑地によっては大形農業機械により台地斜面を埋め立て、畑面を平坦に整えている部分があり旧地形を残している部分は少ない。

(守矢昌文)

第2節 史跡の位置する地形の成り立ち

1. 八ヶ岳の火山活動と尖石台地の成因

尖石遺跡の位置する台地は、八ヶ岳火山列の活動により形成された台地である。台地を形成する第Ⅱ段丘面の主たる構成物は、中山・天狗岳・根石岳・箕冠山・峰の松目・硫黄岳方面起因の菅沢火砕流と大塩火砕流を基盤とし、上部に乗鞍岳・御岳起源の新时期ローム層が覆っている地層を基本としている(文献:4)。



第3図 八ヶ岳西麓台地の状況 (1/50,000)

第2章 史跡を取り巻く環境

八ヶ岳西麓を詳細に見ると標高帯によりその山様相に差異が認められる。尖石遺跡周辺の台地起因となる天狗岳周辺の山塊のあり方を見ると、天狗岳頂上標高 2,645m から標高約 1,600m にかけては天狗岳溶岩による急峻な山容を示し、標高約 1,600m から標高約 1,250m には横谷峡溶岩が流れ覆い丘陵状の地形を形作る。なお、標高約 1,250m 以下には前述したように菅沢火砕流・大塩火砕流起因の東西方向に緩やかに傾斜する台地が形成される。

八ヶ岳西麓には八ヶ岳火山列の重なる山腹を源流とした河川が、南から柳川、鳴岩川、角名川、渋川の主流河川が大きく八ヶ岳西山麓を分けるように東西方向に流下し大きな台地区分を形作っている。

これらの河川で最も大きく山麓を分断する河川は、丸山・中山山腹を源流とする渋川と、赤岳・横岳山腹を源流とする柳川で、渋川の支流として角名川、柳川の支流として鳴岩川がある。これらの河川により火砕流台地の浸食が繰り返され、東西方向に長い尾根状の台地が形成されている。

特に尖石遺跡南側の谷部は河川浸食の様子が見受けられる。谷は通常標高 1,100m 前後以下に見られる八ヶ岳伏流水湧水点を起点とする浸食谷状地形を限界としているが、尖石遺跡南側谷部はそれよりも奥まった標高 1,200 前後の広見にまで至っている。谷状地形の浸食が標高 1,100 前後の八ヶ岳伏流水湧水浸食谷と比較すると深く幅のあることや、鳴岩川・角名川との位置関係、比高差のある谷部と台地頂部の地形の状況から考えると、八ヶ岳中山・天狗岳・根石岳・箕冠山・峰の松目・硫黄岳方面起因の菅沢火砕流と大塩火砕流により形成された火砕流台地が、鳴岩川・角名川による河川争奪により浸食され形成された谷であると考えられる。なお、尖石台地の谷以南にも数条の河川争奪により形成されたと考えられる谷が認められ、柳川と鳴岩川による山麓台地部の浸食活動が活発であったことが窺える。

八ヶ岳西麓の水環境を巨視的に見ると、八ヶ岳火山列山腹を水源とする河川と、標高 1,100m 前後に湧出する八ヶ岳の伏流水による小河川に分けることができる。これらの河川により山麓台地は浸食され、東西方向に必縦谷が放射状に刻まれ、その結果東西方向に帯状に長い長峰状の特徴的な地形を形作っている。

与助尾根遺跡、尖石遺跡から南側に尾根が並列する姿は、典型的な八ヶ岳西麓の姿を示している。長峰状台地と一概に取り扱われる地形を微視的に見ると、尖石遺跡・与助尾根南遺跡・与助尾根遺跡間に見られる標高 1,100m 前後伏流水湧水による東西に長い浸食谷が隔てる台地状地形と、台地上は湧水こそないものの一様ではなく、小規模な舌状尾根や東西方向に入り組む谷など複雑な地形が隠れていることがわかり、台地上も割合起伏のある微地形であることがわかる。この微地形が集落形に影響を与えていたものと予測できる。

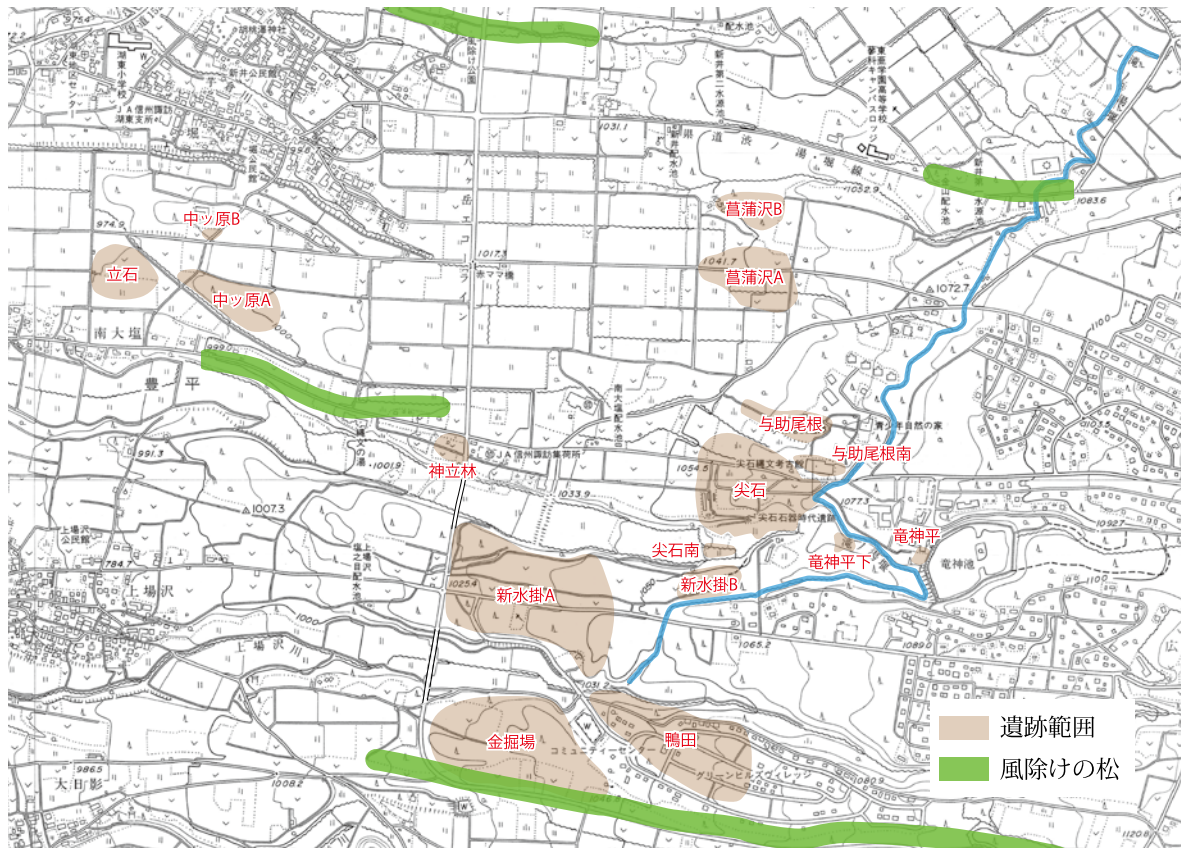
(守矢昌文)

第3節 史跡周辺の歴史的環境

1. 尖石遺跡周辺の遺跡

尖石遺跡周辺には複数の遺跡が群在し、遺跡分布を鳥瞰すると一つの大きなまとまりを形成しているように見える。これらの遺跡の概要を『茅野市史』上巻や発掘調査報告書に基づき概要を紹介する。なお、尖石遺跡周辺に位置し、尖石遺跡群として捉えられる遺跡については別項で取り扱うこととする。

菖蒲沢 A 遺跡 与助尾根遺跡北側約 900m 離れた位置に所在する遺跡で、平成 6 (1994) 年・7 (1995) 年の 2 ヶ年に亘り県営圃場整備事業に伴い発掘調査が行われ、縄文時代中期後葉竪穴住居址 1、方形柱穴列 2、土坑 51、焼土址 1、集石、平安時代後半竪穴住居址 1、焼土址 2、近代掘立柱建物址 1、土坑 2 と縄文時代早期から後期、平安時代に亘る遺物が出土している。



第4図 尖石遺跡周辺の遺跡と文化財

竜神平遺跡 尖石遺跡の八ヶ岳に向かい東側約300mに位置する。谷部の湧水を堰き止め作られた温水溜池「竜神池」を望む台地に位置する遺跡で、昭和16（1941）年溜池造成に伴い縄文時代前期末土器片、平安時代後半灰釉陶器片が出土し、また、昭和49（1974）年には縄文時代早期末土器片が採集されている。

新水掛A遺跡 尖石遺跡の南側谷部を隔て隣接する遺跡である。台地幅は約250～300mと広くこの台地ほぼ全面が遺跡に該当する。昭和5（1930）年宮坂英式・小平幸衛が小発掘を実施、その後昭和12（1937）年・13（1938）年宮坂英式が小発掘を実施し土偶3点を採集し資料報告をしている。昭和52（1977）年遺跡上部の開発に伴い、市道拡幅の必要性が生じ拡幅部について発掘調査が実施された。その結果縄文時代中期中葉独立土器1、ピット群が検出されている。この遺構について集落中央部の独立土器とそれを取り囲むピット群と捉え、周辺から土偶が出土したことも踏まえ大きな環状または、馬蹄形を呈する縄文時代中期中葉の集落が想定されている。

新水掛B遺跡 新水掛A遺跡の北東側に位置し尖石遺跡と指呼の距離にある。北側斜面を臨む台地上に縄文時代中期の遺物が散布しており遺跡であることが判明した。遺跡の内容は不明ではあるが、新水掛A遺跡と同一の台地に占地していることなどを考慮すると、尖石遺跡の南群、北群のような関係にある遺跡とも考えることができる。

尖石南遺跡 新水掛B遺跡の台地北側斜面のテラス状部分で黒曜石が採集され本遺跡の存在が判明した。詳細については不明であるが、遺物量や地形から判断すると小規模な遺物散布地である可能性が高い。「尖石」や「尖石下」と隣接していることから台地北側斜面ではあるが、何らかの関連性を持つ遺跡であると考えられる。

鴨田遺跡 新水掛A遺跡南側谷部を挟んで南東側の尾根状台地に位置する。平成3（1991）年住宅団地

第2章 史跡を取り巻く環境

遺跡名	遺跡種別	中期時期不明	初頭		中葉						後葉				終末
			尾根Ⅰ	九兵衛	尾根Ⅱ	九兵衛	猪沢	新道	藤内Ⅰ	藤内Ⅱ	井戸尻Ⅰ	井戸尻Ⅲ	曾利Ⅰ	曾利Ⅱ	曾利Ⅲ
立石	集落											3	8	6	10
城	集落						2								
水尻	集落				1										
珍部坂A	集落						1								
中ッ原A	集落														
中ッ原B	散布地														
菖蒲沢A	集落														1
与助尾根	集落	後3		1								17	10	2	1
与助尾根南	集落											3	4		
尖石	集落			1	2	1	12	17	10	5	14	20	14	7	9
龍神平下	集落												1		
新水掛A	集落								独						
鴨田	集落	1			2						5	1		1	○
稗田頭A	集落		2		4							3	5	16	1
稗田頭B	集落			9											
稗田頭C	集落		9												
中原	集落			1											
上見	散布地														
梵天原	散布地														
夕立	散布地														
日向上	集落	1										1			
塩之目尻	集落				2	1					3	5	4	11	5
中ツルネ	集落	10				2	4	1							
梨ノ木	集落		1	4	15	22	6	9	6	13				1	1
威力不動尊東	集落											1			
久保御堂	散布地														
師岡平	集落		1	1							1	○	○	1	2
上の平	集落				2	1	1								

第1表 尖石遺跡・与助尾根遺跡周辺の縄文時代中期遺跡と住居址数

造成に伴い遺跡の消滅する箇所を中心に4ヶ所の調査区を設け発掘調査が行われた。その結果縄文時代中期中葉竪穴住居址2、中期後葉7、不明1、後期中葉3、縄文時代中期終末方形柱穴列1、土坑250が検出され、縄文時代前期末葉から後期中葉の土器片が出土している。特に縄文時代後期初頭のまとまった土器群が第1号竪穴遺構から出土し、該期の資料が少ない八ヶ岳西麓では注目すべき資料である。

^{かなほりば}**金堀場遺跡** 発掘調査等が行われていないため、詳細な遺跡の状況は不明ではあるが、遺物が散布する台地幅も広く、縄文時代前期末から中期全般に亘る土器片が採集されていることなどを考慮すると新水掛A遺跡ほど大規模ではないが、鴨田遺跡よりもやや規模の大きな集落址であると考えられる。

2. 旧石器時代から古代の尖石遺跡周辺の歴史的環境

尖石遺跡に人々の痕跡が認め始められるのは旧石器時代からで、黒曜石製の槍先形尖頭器1が出土している。八ヶ岳西麓の旧石器時代の遺跡は、尖石遺跡と同等の標高の柳川沿い段丘に尖頭器を中心としたブロックを持つ夕立遺跡、馬捨場遺跡がある。尖石遺跡の場合遺物ブロックが未検出で旧石器時代の様相は不明な部分が多いが、旧石器時代から尖石の地が利用されていたことがわかる。

縄文時代草創期では与助尾根遺跡から有茎尖頭器1が出土している。有茎尖頭器は八ヶ岳西山麓で断片的

に採集され、尖石遺跡の南方に位置する金掘場遺跡、梵天原遺跡、八ヶ岳農場遺跡から単発的に出土している。これらの資料から縄文時代草創期八ヶ岳西麓は広域に亘り狩猟域等として利用されていたと考えられる。

縄文時代早期前半の遺構として明確な生活痕跡は認められないが、縄文時代早期前葉押型文土器片（山形文・楕円文）が与助尾根遺跡から出土している。また、竜神平下遺跡では遺物の伴出はないものの集石土坑が確認され、遺構の状況等から縄文時代早期の可能性が高い。与助尾根遺跡周辺でも与助尾根南遺跡（山形文）、菖蒲沢A遺跡（楕円文・山形文）、長峯遺跡（楕円文・山形文）から押型文土器片が出土し、散發的ながらこの時期に八ヶ岳西麓への進出が活発化したことがわかる。

縄文時代前期前葉に1軒の竪穴住居が与助尾根南遺跡に作られる。縄文時代早期末葉・前期前葉の単独住居址は、中原遺跡（早期末）、中ッ原A遺跡（前期初頭）の類例が確認され、縄文時代早期前半よりも八ヶ岳西麓が積極的に生活領域として利用されたことが窺える。

時期は不確定だが、与助尾根南遺跡では縄文時代中期後葉曾利Ⅲ式期の住居址に切られ、与助尾根遺跡では縄文時代中期後葉曾利Ⅱ式期の住居址に埋め戻された落とし穴や、これに連なるように4基の落とし穴が検出され、所属時期は不明なものの縄文時代中期以前、与助尾根遺跡・与助尾根南遺跡の場所が落とし穴猟域として利用されていたことがわかる。与助尾根遺跡周辺でも下尾根遺跡などで落とし穴が列をなし群在する落とし穴猟域が確認され、渋川に沿って東西方向に小さなグループが点在する、渋川周辺八ヶ岳西麓群とグループ分けされており（文献:5）、与助尾根遺跡の事例もこれらの群に帰属するものであろう。

縄文時代前期末葉に入ると八ヶ岳西麓では、北山菖蒲沢B遺跡・鴨田遺跡・上見遺跡^{あげみ}のような住居址や土坑群が検出される遺跡が点在するようになり、縄文時代中期初頭集落の増加へつながっていくが、尖石遺跡、与助尾根遺跡では明確な縄文時代前期末葉の遺構は確認されておらず、集落が形成されるのは縄文時代中期初頭に入ってからである。

縄文時代中期の八ヶ岳西麓の遺跡と発見された住居址数を第1表に示した。それによると縄文時代中期に入り集落が群在し始める傾向を看取することができ、特に尖石遺跡周辺に大きなまとまりがあったことがわかる。尖石遺跡の南側に谷を隔てて新水掛遺跡、鴨田遺跡、金掘場遺跡と縄文時代中期の集落が林立する様を宮坂英氏は、一大聚落群と捉えている（文献:6）。

尖石遺跡、与助尾根遺跡では縄文時代後期の明確な資料は得られていないが、与助尾根南遺跡では縄文時代後期初頭の資料が断片的に出土している。なお、尖石遺跡南側谷部に於いて昭和14年5月宮坂英氏が敷石住居址を調査しており、この敷石住居址が後期の可能性も考えられる。尖石遺跡周辺の縄文時代後期の遺構が検出されている遺跡は、新水掛A遺跡（敷石住居址）・鴨田遺跡（敷石住居址・住居址）・稗田頭A遺跡（敷石住居址）があり、尖石遺跡に縄文時代後期の生活痕跡があってもおかしくはない状況にある。

縄文時代以降人々の痕跡は断絶し、新たに与助尾根遺跡に人々の足跡が認められるのは、古墳時代前半からで、昭和24年5月8日第121号（8号-S24）住居址から土師器高坏片の破片が出土し、この資料について宮坂英氏は

「午後幸衛氏が南西隅の芝生を剥ぐと、真赤な土器破片が出た。埴部土器の高坏の破片で、裏には高台のとれた痕がある。この発見は何を示唆するであろうか。この遺跡にとって、否、尖石遺跡の後日についての興味ある問題を提供したことになる。（後略）」（文献:7）

と述べ遺物を紹介している。この資料について後述の文献内で諏訪清陵高等学校地歴部員戸沢充則が資料報告を以下のようにしている。

「資料4 高坏の残片で脚部は全部欠損し、僅かに脚が中空であった事を示す痕跡を留める。全体に赤褐

第2章 史跡を取り巻く環境

色を呈し、土質・焼成良好で、器内外面とも研磨されて平滑である。坏部の厚さは五糎～八糎で、外部が段状をなしてほんの少し外反し、軽い稜をなす。この資料は第八号芝下から検出されたもので、恐くは奈良時代に属する藤森栄一氏の真間式、杉原莊介氏の須和田期に当るものではなかろうか。(後略)」(文献:8)

とあり、これらの記述を総合的に考えると赤色塗彩土師器高坏が、また、与助尾根遺跡第124号(11号-S24)から小形甕口縁部、第141号(28号-S27)からは台付甕脚部の出土があり、古墳時代前半この地がどのような役割を果たしていたものか興味深い。

次に平安時代後半の竪穴住居址が検出されている。調査時には平安時代の竪穴住居址として認識されておらず全貌は不明であったが、与助尾根遺跡でカマド1が確認され諏訪清陵高等学校地歴部員戸沢充則は

「5 上述の縄文古式土器と対照的に、奈良・平安時代に属すると思われる二・三の資料が注意されている。」(文献:8)

と与助尾根遺跡出土の須恵器碗片、竜神平遺跡の灰釉陶器碗片出土の実例を挙げ

「6 これら資料とは別に与助尾根第九号趾北方五米、地下三十糎位の浅い所から手頃な石を多数積み上げた窯趾のような遺構が、宮坂先生の手によって発掘された。(中略)7 こゝにあげた三つの資料は、前の古式土器にも倍して、与助尾根遺跡とは直接その学問的意義を認める事は出来ない。強いてこれら資料に文化的意義をもたせるならば、延喜式或いは和名抄に見られる御牧山鹿・塩原・大塩などの牧についてであろう。大塩の地名などからもこれらの牧が北山浦一帯を中心としてこの附近にあった事は知られるのであるが、与助尾根出土資料が、年代的に不合理を感じない点などを考え合せて、その文化的意義も理解されるであろう。」(文献:8)

と与助尾根遺跡の石積窯趾を評価している。写真は残されてはいないが平面図が残され、この図から推測するとこの遺構は平安時代の石組カマドと考えられる。与助尾根南遺跡からも平安時代後半の石組カマドを持つ竪穴住居が1軒発見され、与助尾根遺跡と与助尾根南遺跡間の谷を挟んで散在する住居景観が想定できる。

また、同様な単独住居は鴨田遺跡、菖蒲沢遺跡と与助尾根遺跡周辺の遺跡からも発見され、これらの散在する平安時代後半の住居は、山麓部の開墾や山棲み、等に関わる住居と考えることができよう。積極的に与助尾根遺跡、与助尾根南遺跡、鴨田遺跡、菖蒲沢遺跡の立地状況を評価すると、住居址が浅い谷部を臨む台地を選地し住居が作られていることを考えると、谷戸田の開墾などに関わる住居址とも想定することができよう。なお、竜神平遺跡から灰釉陶器碗、土師器坏が採集されている。

3. 中世以降の尖石遺跡周辺の歴史的環境

尖石遺跡周辺に中世の痕跡を直接示す資料は認められないが、この地を管理していた南大塩村落が文和3(1354)年の奥書を持つ『年内神事次第旧記』には大塩ひる沢と記され、その後の祭礼負担金を拠出していることを考えると、南大塩村落は中世からの古村であることがわかる。

中世、『年内神事次第旧記』には「鹿なくてハ御神事ハすへからす候」とあり鹿は重要な贄であった(文献:9)。尖石遺跡の北側に位置する笹原集落の鹿狩神社周辺に鹿狩り場があったとの口伝や中世の鉄鍬出土(文献:10)があり、この神社周辺に縄文時代に落し穴群が検出された下尾根遺跡の成果を参考にすれば、尖石遺跡周辺も同様に狩猟域として利用されていた可能性はあり得る。

この地の利用状況が明確になるのは江戸時代に入ってからで、前述したように南大塩村の入会地として利用が主なものであった。南大塩村の山林の入会は、南大塩山と呼ばれる渋川なるいわと鳴岩川に挟まれた中山・天狗岳・根石岳の山腹で、ここに至る山道が現在の市道甲1号線の前身にあたる。当時肥料用の草類・飼料用の

まぐさ
 稜、屋根材の萱・建築用材、薪炭等は入会山から調達され、馬を利用した物資搬出がこの経路であったと考えられ、この道筋は享保18(1733)年に編纂された『諏訪藩主手元絵図』(文献:11)にも描かれている。なお、この地を所管していた南大塩村は八ヶ岳西麓でも大きな村落で、この村を本村として18世紀以降新田村が見立てられる。南大塩村の占有する広大な山麓は東嶽と称され、現在七ヶ耕地財産区により管理されている。

18世紀に入ると高島藩の積極的な新田開発に伴い開削堰が開設され、いくつもの^{あげせぎ}「揚げ汐」ができる。宝永7(1710)年渋川を水源とする渋堰が開削されている。この堰は南大塩村と中村村の共同で作られている。導水路は明確ではないが、現在市道甲1号線に沿うように「空堀」と呼ばれる開削堰跡の一部が残っている。この「空堀」は宿中用水(使い川・飲み水)として南大塩村へ引水していたが、水質悪化等のため廃絶したとの口伝があり、平成2年に行われた試掘調査による「空堀」の調査でも、掘割底に砂礫や磨滅した土器片が確認されたことから流路として機能していたことが判明している(文献:12)。位置関係や廃棄状況から考えるとこの「空堀」が渋堰の旧路であった可能性が高い(文献:13)。

安永4(1775)年以降坂本養川により開削堰が整理されている。特に八ヶ岳西麓を南北に横断する「揚げ汐」の中で、天明5(1785)年完成した滝之湯堰は、八ヶ岳北側に位置する蓼科山山腹から流れる滝之湯川を水源とし、宝永7年開削の渋堰を改修し、ちょうど八ヶ岳西山麓の台地分岐点の標高約1,100m近辺を横断するように設けられ、ちょうど尖石遺跡の東側上部を断ち切るように開削している。

この滝之湯堰と台地との位置関係は、台地の分岐や八ヶ岳伏流水湧水点を外す配慮が窺えるもので、堰本流は尾根状地形の起点上を回るように設定されている。この堰から取水し山麓部の開田部に引水する、所謂落とし堰が東西に設けられている。尖石遺跡内を東西方向に流れる、滝之湯堰に取水口を持つ^{そうじくほせぎ}雑司久保堰もこのような堰の一つで、地形の低い部分を選び開削したものである。この雑司久保堰の開削時期などは不明だが、滝之湯堰から分水していることなどを考慮すると、滝之湯堰の改修時に開削された可能性が高い。なお、明治26(1893)年の小平小平治の調査は、この開削堰の斜面で行われている。

また、水田を南東方向からの風害から守るため、台地の東西方向の縁に沿ってアカマツ等が植栽された風除け林が作られている。北西1.5kmには宝永2(1705)年3月9日『御用部屋日記』に植栽の願い出記載のある「芹ヶ沢の風除け」が位置している(文献:14)。高島藩への願出には

「九日 晴 ○中略 □芹ヶ沢村深草通之田地へ風当難儀之趣、依之植木致度由願出候、各相談之上植させ可然由ニ相済、新居新田之上分段々山の方江長六百五拾間、幅三間ニ植申答ニ候、」(文献:15)

と記載され山麓部の開田とそれに関わる風除け林の育成が早くから行われていたことがわかる。

以上のような入会山・山道・開削堰・風除け・新田開発は、江戸時代の八ヶ岳西麓開発の歴史を現代に伝える重要な歴史的遺産である。また、坂本養川が整理・改修開削した大河原堰と滝之湯堰は、八ヶ岳山麓の農業開拓の歴史を今に伝える重要な農業遺産として平成28(2016)年11月世界灌漑遺産に指定されている。

このような江戸時代中期以降の開削堰建設に伴う大規模な新田開発だけではなく、与助尾根南遺跡と与助尾根遺跡間にある八ヶ岳の伏流水を利用した谷戸水田などは、むしろ開削堰以前の水田景観と考えられ、与助尾根遺跡・与助尾根南遺跡の平安時代後半の住居址を積極的に評価するならば、いずれの遺跡も谷戸水田の開発と関連付けられると考えてもよいのではないだろうか。

4. 地形と土地利用

第2節地形の成り立ち、3節歴史的環境を述べてきた。これらを総合して八ヶ岳西麓の地形の変化、場所利用状況を近世入会等の情報や、植生状況を踏まえ土地の利用状況を復元してみると、標高1,000m以下の

第2章 史跡を取り巻く環境

谷頭浸食の進行した緩やかな山麓部は秣原・田畑としての生産域、標高 1,000m から山麓部が急峻になりつつある山麓は茅場、萩刈場、薪炭林等の採集域、八ヶ岳山腹の前山群から頂上部までは用材林や、鷹山等として利用されていたと想定でき、この土地利用は近代明治以降、八ヶ岳山腹の前山群から頂上部が国有林に変化し、また、秣原として入会地であった山麓部の一部は明治 25 年前後に分割され、個人所有の畑地として開墾され、現在の景観が形成されている。

宮坂英式が尖石遺跡周辺の領域復元を行った際、尖石遺跡上部の広野を資源地区と位置付け狩猟場、植物性食物の採集場（文献:16）とした背景には、江戸時代から続く八ヶ岳山麓入会の土地利用を踏まえての着想があったものと思われる。

（守矢昌文）

参考引用文献

- （文献:1）宮坂英式 昭和 32（1957）年 12 月「序説 史蹟尖石石器時代遺跡」『尖石』茅野町教育委員会 15 頁
- （文献:2）大久保善立 昭和 63（1988）年 3 月「第 5 章言語伝承 第 4 節伝説」『茅野市史』茅野市 1074・1075 頁
- （文献:3）株式会社パスコ 平成 28（2016）年「別編（3）水文環境」『特別史跡 尖石石器時代遺跡保存管理計画書』茅野市教育委員会 123・124 頁
- （文献:4）両角昭二・北沢和男 昭和 61（1986）年 2 月「第 5 章茅野市の地形の生いたち 第 3 節地形面の形成」『茅野市史』別巻 自然 茅野市 75－82 頁
- （文献:5）守矢昌文 平成 18（2006）年 3 月「八ヶ岳西南麓・霧ヶ峰南麓における縄文時代の落とし穴について」『新尖石縄文考古館開館 5 周年記念考古論文集』茅野市尖石縄文考古館 111 頁
- （文献:6）宮坂英式 昭和 21（1946）年 12 月「尖石先史聚落址の研究（梗概）—日本石器時代中部山岳地帯の文化—」『考古學特輯號』會報 3 號 諏訪史談會 5 頁
- （文献:7）宮坂英式 昭和 32（1957）年 12 月「与助尾根遺跡の発掘調査 第三次発掘（昭和二十四年）」『尖石』茅野町教育委員会 161 頁
- （文献:8）戸澤亮則 昭和 25（1950）年 1 月「與助尾根発見の新資料」『史実誌—尖石・与助尾根特輯号—』4 史実会 16・17 頁
- （文献:9）柳川英司 平成 18（2006）年 3 月「中世における食器の使用について—諏訪神社の神事と発掘の成果から—」『新尖石縄文考古館開館 5 周年記念考古論文集』茅野市尖石縄文考古館 174 頁
- （文献:10）諏訪史談會 昭和 43（1968）年 9 月「笹原 笹原新田」『諏訪史蹟要項』24 57 頁
- （文献:11）諏訪史談會 昭和 61（1986）年 1 月「南大塩村」『諏訪藩主手元絵図』87・88 頁
- （文献:12）鶴飼幸雄 平成 3（1991）年 3 月「第 IV 章調査の成果 第 1 節確認された遺構とその遺物 空堀」『国特別史跡 尖石遺跡—保存整備事業に係る試掘調査報告書—』茅野市教育委員会 18 頁
- （文献:13）小平久平・小平義市 平成 11（1999）年 4 月「第八章水利 第一節南大塩村に関係ある汐 横谷汐（渋汐）」『南大塩のあゆみ』南大塩区 148・149 頁
- （文献:14）細田貴助 昭和 62（1987）年 11 月「第六章農業と水利 第八節農業経営 風除」『茅野市史中巻』茅野市 675・676 頁
- （文献:15）浅川清栄 平成 10（1998）年 9 月「農業用水と坂本養川関係資料」『諏訪の農業用水と坂本養川』諏訪の農業用水と坂本養川刊行委員会 179 頁
- （文献:16）宮坂英式 昭和 17（1942）年 11 月『尖石遺蹟に就て（發掘報告要項）』8 頁